

【奨励賞】

「生きやすい社会」

彦根市立稲枝中学校 3年 早崎 優奈

生活している中で、「なんだか生き苦しいなあ」、「こういう人にとって生き苦しいんじゃないかなあ」と感じる時があります。

きっかけはハサミです。学校で牛乳パックを切っていると、友達あまり見えないような少し危ない持ち方でハサミを使っていて、「すごい持ち方してるけど、手、切れない？大丈夫？」と聞いてみました。すると、「私、左利きだからこっちの方が上手く使えるんだ。左利きって不便だよ」と、思いもしない答えが返ってきました。

これを聞いたとき、利き手でハサミの使いやすさが変わるなんて大袈裟なのではないかと思っていました。試しに左利き用のハサミを使ってみると、切れるものの、私にとってとても使いやすいとは言えません。私が左利き用のハサミを使いにくいと感じるということは、友達が右利き用のハサミを使いにくいと感じることと同じことです。「十人に一人が左利き」と言われている今、どうして当たり前のように右利き用のハサミしか置かれていないのでしょうか。

「少ない方が多い方に合わせるっていう多数決みたいな習慣や、昔からの固定概念が、ずっと続いているんじゃないかな」という父の言葉にハッとさせられました。父自身、もともとは左利きで、子どもころに、これから生活がしやすいよう、祖母に右利きに直してもらったそうです。確かに左利きの人、世の中の右利きの物に不便を感じながらも我慢して合わせている気がします。「あれ、これって、右利きの人への配慮と左利きの人への配慮が平等に存在していないことになるんだ」と気付きました。

そこで、左利き用に作られた製品はどんなものがあるのか調べてみると、「こういうデザインがあるんだ」と、私は、初めて知るようなたくさんのユニバーサルデザインに出会うことができました。ユニバーサルデザインは、「障がいのある方が利用しやすいようにするためのデザイン」というイメージが大きいですが、高齢者や小さい子ども、妊婦の方などさまざまな人のためのデザインで、もちろん左利きの人のためのデザインでもあります。

私が知らなかったように、このユニバーサルデザインを知っている人が少なく、世に出まわっていないことが十人に一人、不便を感じてしまう原因なのではないかと考えます。「右利きが当たり前」と、少数派が意識されにくくなり、今まで私も左利きの人困っていたということを考えてことはありませんでした。偶然友達の行動に疑問をもった私は、興味をもって調べてみたけれど、知らなかったのは私だけではないはず。

そのことから、自分から知ろうとすることが誰もが住みやすい社会にするこ

とに繋がっていくことなのだと確信しました。誰もが平等な権利をもって生きるには「知ろうとする努力」が大切だと考えます。人権について考える中で、私は、知っていることより知らないことの方が圧倒的に多かったです。まわりの人のことを「知らない」で片づけることもできるけれど、知ろうとすることで「人と違うことは怖くないことなんだ」と感じることもできます。

年齢、性別、出身地、利き手、好きなもの、得意なこと、性格、考え方、家族のかたちなど人はそれぞれ違います。これらの違いを「調子にのっている」、「普通じゃない」、「私たちとは違う」と追いつめたり、責めたりすることはおかしいです。私たち個人の違いは自分らしさをつくる大切な「個性」であることをみんなが認識していくべきです。

左利きの人だけにかかわらず、世界中に住んでいる人々が生きやすい平等な環境を自分たちでつくっていかうと思えるようにするには、正しい知識を身につけることも重要なことだと思います。ネット上での心ないコメントや、うわさ、偏見など、私たちの心の中にある常識を相手に押しつけて強制させることは差別です。人と違うものや自分と違うものを否定するのではなく、私は、「知ろう」とする前向きな気持ちをもってこれから関わっていく人たちに向き合いたいです。政治の力だけに頼るのではなく、今、私のまわりから小さなことでも「生き苦しさ」をなくしていきたいと思います。